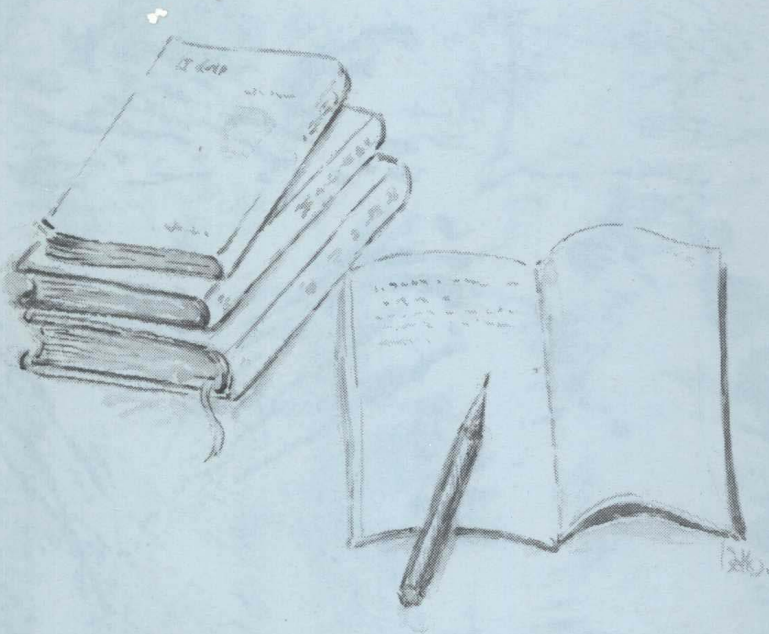


文集
相聞歌



田上先生遺稿集編集委員会

ひたし

ら

ら

あ

う

わ

う

う

テレビの音がその日に限り妙に気になり再度訪問したのでした。あいかわらずテレビの音が外まで聞こえていました。戸を叩いても大声を出しても返事ありません。裏にまわりましたら、牛乳が二本置かれていました。新聞もありました。変事をさとりこれは大変と、後ろの飯ヶ谷さん宅へ飛び込み連絡を頼みました。

先生のご葬儀の後、ひと月程過ぎた日、手文庫を開けるのに立ち会いました。あの原稿はと気になっていた一夫先生の「教育断章の原稿」とアエ子先生の「俳句ノート」がありました。この原稿さえあれば、その他に『アララギ』等の短歌誌より選出した歌を併せて、両先生の遺稿集が出せるのだ、との結論に達し編集が開始されました。

『遺稿集』に合わせ、教え子の皆様と関係者の皆様の文集も企画され、原稿の依頼に走り回りました。おかげさまで『相聞歌』が出来上がったのであります。両先生の作品とあわせて読み比べてください。万葉の時代も現代も人間の愛には変わりなく、ここ加須市大字川口の地に二人のすばらしい田舎教師が存在していたことを知るのであります。

本作品を相携え、両先生の墓前に捧げたいと存じます。

ここにご投稿掲載されました皆様、ならびに関係の皆様様に、心より感謝御礼申し上げます。

平成三年三月三日

編集責任者 野 本 誠 一

まえがき

このたび、故田上先生ご夫妻の遺稿集の発刊に合わせ両先生縁りの人たちによる、文集を提案しましたところご賛同をいただき、多数の皆様より原稿が寄せられました。ここに上梓の運びとなりましたことに、心よりお礼申し上げます。縁あって私は、アエ子先生と最後にお会いしたのであります。私の会ったあとに、電話では二人程お話をされた方がおられるとお聞きしましたが、私は特に縁が深かったことを感じております。

五月一日都合で休暇をとりまして、加須郷土史研究会の総会準備と受け持ち会員の会費集めをしておりました。アエ子先生も郷土史の会員なので先生宅へは午後三時頃伺いました。その時先生は昔の手紙を整理していました。巻紙の手紙を見せていただき夕日が西に沈むまで世間話をしました。「主人の十七年忌なので十月には法事をするのよ。」とおっしゃったので、会費の集金が済み次第、案内状の参考を見せにくる約束をしました。

五月四日の朝『埼玉史談』をもって埼玉郷土文化会の会員勧誘にでかけ、鷲宮神社の相沢宮司様外数軒を訪ね、昼飯を食べに自宅に戻る途中先生宅へ寄りました。テレビの音が外まで聞こえていましたが、いつもの昼寝と思い家に帰りました。四時頃電話をかけましたが応答がありません。

目次

まえがき	
田上先生ご夫妻のおもい出	
遠い記憶から（一夫先生から伺ったご自身のお話）	
只管打座	
回想の田上一夫先生	
育てられていた	
函館にて師を思う	
田上一夫先生のこと	
恩師（俳句）	
田上先生の思い出	
心にのこったこと	
見ること考えること	
野本誠一	1
鈴木佳男	4
木村信子（松永）	12
細井利治	14
中島 愈	20
石井かつ子（杉本）	23
永橋 皎	26
小暮洋子（吉田）	29
中里久子（野本）	30
小池弘子（小菅）	32
鎌田あい子	35
折笠シゲ（奈良）	

田上一夫先生の思い出
 田上一夫先生の思い出
 思い出すままに
 心に残る思い出
 私の憶いで
 「アエ子先生」
 温情豊かな数々のお便り
 エーゲ海に永遠の愛を誓う
 野火止
 アエ子先生と私
 あとがき

町田社要	39
臼倉愛子	44
遠井近子（矢島）	51
中島一之	55
鈴木秀雄	64
高橋房子（戸枝）	68
小野有子（近藤）	73
関 富子	78
竹内政雄	80
野本誠一	83
藤間晴子	87

田上先生ご夫妻のおもいで

鈴木 佳 男

文学的才能に富んだ田上一夫先生と、人から女傑とも評されたアエ子先生が永眠され、生者必滅、会者定離とは申せ、人生のあわれを考えさせられるまま、憶い出の二、三を以下記します。

私は、アエ子先生と戦時中の二年余の短期間でしたが、大桑国民学校でお世話になりました。

先生が埼玉女子師範卒業後、最初の赴任校三俣小学校で教鞭を執られた当時、私は小学生でした。校庭で高等科の生徒を相手に、バスケットを指導されていた、体操着姿の若い伊藤先生をおもい出します。和服で袴姿の青木玉緒先生と並んで、戦前に通勤した、洋服姿の縁無しメガネをかけた伊藤先生をなつかしむこのごろです。

戦時下の教員不足時代に、助教で新米教師の私が或る日、男組担任の児童数人を、職員室の一隅に座らせて説教した挙句、ビンタの制裁を加えた様子を、折悪しく居合わせて目

撃された田上先生から、その後、「鈴木先生、幕末の侠客・清水次郎長は、自分を叱るときは、誰もいないところで、一対一で叱ったそうですよ……」と、気易く話されました。

戦時下の軍隊式鉄拳制裁が横行した、青少年学校教育時代だったので、私自身が受けた学校教育その俤を、よかれと思って無意識裡に児童への対応に用いていることを、深く反省いたしました。児童の人権尊重を、次郎長の例をひいて理解させようとなされたことでした。

先年、大桑時代の教え子たちの同窓会に招待された席上、M君から聞いた話で、田上先生の教訓をなつかしく思い出しました。それは、「かつて、田上先生から、『M君は子どものとき、担任だった鈴木先生から、お前たちのいたずらは、先生自身の至らなさから起きたことだから、先生の顔を思いきり殴れ！』と言われたとき、鈴木先生の頬を、のびあがってぶんなぐったことがあったネ。M君は勇気がある子だったネ」と、言われました。」という話でした。

例話をひかれて、深く考えさせられる、しかも説教らしさは微塵もないご指導はその後、これが児童教育の真髄と思い、拳拳服膺した私でした。

私は大桑国民学校退職の翌日、昭和二十年四月一日に陸軍現役兵として入隊しました。初年兵の私に宛てて、田上先生自らの慰問文と、女組担任クラス生徒たちからの軍事郵便

を沢山頂きました。戦友たちからは大変羨ましがられ、そして元気づけられたことは、忘れられない思い出の一つです。

田上先生の検印済みの、今では赤茶けた、三銭のハガキ（私製ハガキも含む）は、現在も大切に保存しています。

終戦後、川島正義熊谷児童相談所長のもとで勤務していた、昭和二十三年四月以後の或る日、不動様の裏にあった木造校舎の新制不動岡中学校を訪問しました。某少年相談の用件でした。当時の教頭が田上一夫先生でした。復員後、初対面だった田上先生から、教育談義をいろいろ拝聴いたしました。

先生が尊敬する教育者の一人だという旧制浦和中学校の今井精一校長先生が、剣道場で、剣道着姿で竹刀を持った俣、大往生を遂げられた話や、教師の生命は、児童生徒への授業にあって、授業時間はまさに真剣勝負に相当するものだと、力をこめて話されました。

さらに、児童相談所業務も、大桑出身の川島さんという名所長のもとで、全精神を打ち込んで頑張れよ！と、二十歳台の私を励まされた、坊主頭の飾らぬ田上先生が、なつかしくおもい出されるこのごろです。

人間教育愛に徹した生涯を貫かれた、両先生のご冥福を、心からお祈り申しあげ攔筆いたします。

合 掌

（加須市諏訪在住）

遠い記憶から（一夫先生から伺ったご自身のお話）

木村 信子

——小学校の頃—— 大正八年～十四年

懸賞作文入賞

題は「銀の笛」。銀の笛を東京からのおみやげにいただいた。当時としてはめずらしい楽器で、うれしくてそのことを作文に書き入賞。

独唱

技能学科では音楽が得意。特に美声で学芸会で独唱した。

百米走はどうにもならぬ

「ぼくは不器用でねえ、体育はからきし駄目なんだよ。それで鉄棒や跳び箱が跳べないと日曜日に母に弁当を作ってもらって学校へ行ったもんだよ。できないから何とかできるよになりたいと、何十回何百回やっているうちに、少しずつ出来るようになった。上手とまでは出来ないが出来るようになったんだがねえ、百米走だけは、いくら練習しても、ほ

とんど進歩しなかった。百米走は、素質がないのかどうにもならなかったねえ」

二番だっていい

卒業間近に担任の先生に呼ばれた。先生曰く、

「あなたは本当は一番だけど二番になってもらいたい。」

そのことを母親に告げた。母親は

「二番だっていいじゃないか、お前の力にはかわりないんだから。先生だって村の人に色々氣遣いがあるんだろうよ。」

と快諾し二番にならせてくれた。

――不動岡中学の頃―― 大正十四年～昭和五年

時計

入学祝いに時計を買ってもらった。うれしくてその時計の中身がのぞきたくなった。蓋をあけて夢中になってみていたら、鼻をたらしてしまった。その時計は錆びてしまった。

左右の区別

中学に入学した時、クラス委員になった。体育の時、先頭を歩くことになった。ところが、

「右に曲がれ」

と号令かけられると、とっさに左右がわからない。

「母がねえ、左側のズボンの手の位置に手拭をさげられるようにしてくれ、それで助かったんだよ。本当に鈍い子だったんだよ。」

読書

学校の図書館から毎日借りた。手あたり次第何でも読んだ。この時読んだものが、何か漫談めいたおもしろいくだらな話をする時に出てくるそうだ。成績は下がった。

「ぼくの自転車の荷台はいつも本がくぐられていたんだよ。」

――師範学校――昭和五年～六年

習字

同級生たちはみんな器用で何か得意学科を持っていた。何もなかったので悪筆を承知であえて習字に挑戦、書いて書いて書きまくった。カサモより一メの半紙を求め、幾日かでなくなる程書いた。習字がうまいという人もいるけど、そうではない。素質はないのだからの何十倍も努力した。ただやっただけのこと。「ぼくぐらい努力すれば習字は誰だってうまくなるよ。」

——教育界へ—— 昭和六年より

禁酒

父親が酒好きで酒に溺れ母は苦労した。働き通しのその母の姿をみて

「絶対酒は飲むまい。」

と決心した。親の子だから飲めばいくらでも飲めるだろう。しかし一滴も飲まないで通した。

「酒位飲めなくては教育者になれぬと人はいうが、ぼくはそうは思わない。酒は飲めずとも子供の教育は立派に出来る。」

——加須小で—— 昭和七年～二十一年

朝礼

「加須小の時、ぼくは体育は苦手なんだが毎朝、朝礼台で裸になって指導したんだよ。子どももよくついてきてくれてまあ誰に見せても恥ずかしい程度になったんだ。」

ある日、視学官の視察の朝、先輩のY先生がぼくの所へ来てね、
「今日はぼくが朝礼台に立つから君はいいよ。」というなり朝礼台に上がってしまった。あっけにとられ、苦笑

せざるを得なかったよ。」

熊谷へ

熊谷に疎開したアララギ派歌人、鹿児島寿蔵先生に師事、日曜毎に自転車で熊谷まで教
えを受けに通った。当時の自転車はすぐパンクするので、パンク修理の道具を持ち、何時
間もかけて熊谷へ行った。

短歌

六年中組の教室でつぶやかれた。「昨日、寿蔵先生のところへ行って来たけどだめだ
なあ。うまい短歌ができないなあ。先生がぼくの短歌をみて

「きみ、このところがまづいんだよ。分かるかい」

と錐でさされてねえ、穴をあけられてしまったよ。才能がないんだねえ。」

盗まれた自転車

通勤用の自転車を盗まれてしまった。往復三里（十二キロ）の道を徒歩で加須小まで通っ
た。帰途疲れると途中の勘兵エ沼のほとりで休んだ。その年、卒業生の教え子から中古の
自転車を贈られ、そのことが新聞に載った。

――新制中学―― 昭和二十三年～四十七年

万年教頭

誰にも自慢できるのは教頭生活の長いこと。万年教頭といわれた。三月になると教育委員会から呼び出しがくる。いつもきまっていわれる言葉、

「あなたは、今年校長になる筈でしたが、来年一年だけ待ってくれませんか。」

不動岡中、西中、大桑中、東中、水深小、樋遣川中、加須小、の教頭歴任。

その後大利根町立元和小学校長となった。

まわり道

「ぼくはねえ、ずい分とまわり道をした。最後に県から教育功労賞をいただいた時、一直線に出世した人と同じだったんだ。到達点が同じなら、努力したことは無駄でないことがわかった。人間、自分のことを振り返ってね、私はこれでよかったんだと思えばそれでいいと思うよ。」

◇

◇

◇

私は先生のことを必死で思い出した。はるか彼方の事でおぼろげな記憶もあった。思い出すと、先生が、ほほ笑みながら、なつかしそうに話しかけて来るような錯覚さえた。自分を飾らずに、そして控え目な先生が、本心を語って下さった。先生教育にける情熱は先生の「生き方」そのものだと思う。

純粹、努力、優しさ、教育の基本そのものの師にめぐり会えたことの幸せを嘯みしめ、これからの日々を無駄にしてはならないと思う昨今である。

病床の師

万葉の男女の愛は素朴なりそのこころ説く頬紅くして

信子

ベッドに横臥した先生は、万葉の歌について、『素朴だろう』『うまいだろう』としきりに話しかける。相聞歌があとからあとから溢れでた。あまりの純粹さに酔い、紅潮した先生の頬に一筋の涙が光った。無知な私は、ただその雰囲気圧倒され、涙をこらえうなづくのみ。

目をとじて教育語るその口調熱き想いに声凛々と

信子

昭和四十八年一月より生きる希望をという奥様の案で、教育断章の執筆をすすめた。気分よい時は自筆で、すぐれない日は口述筆記をした。

足萎えていたき体をかばひつつひたすら歩む命信じて

信子

自宅療養に移ってから、歩けなくなると困るからとベッドよりおりて歩くことを日課となさった。それが生きる証であるならと、奥様はその姿に耐え、止めさせることをなさらなかった。

熟れし柿窓越しに見ゆ小春日に立ちて歩めよわが師の足よ

信子

もう歩くことが出来なくなった。真っ赤な柿が静かな陽に映え、私は思いを込めてそつと足をさすった。

青き空落ち葉の煙ひとすじに亡き師の庭に白くのぼりて

信子

あの柿の葉も落ちた。風のない穏やかな日、落ち葉を集めて燃やした。澄んだ青空にひとすじの煙が舞い昇っていった。あらためて師を失ったさびしさがこみあげてきた。

（加須市大門町在住）